

日本海セトロジー研究グループ

代表就任にあたって

金沢医科大学 平口 哲夫



このたび、福井県三国町で開催された第八回日本海セトロジー研究グループ総会において、児玉公道代表の任期終了に伴い次期代表に選ばれましたので、ふつつかながらご挨拶申し上げます。

一九八八年、山田致知先生を中心に結成されたセト研は、先生ご自身が生前述べられておられましたように、当初の構想をはるかに上回る発展をとげております。発足当初三二名を数えた個人会員は、年々増加し、一九九七年六月六日現在で二二一名、約四倍の規模となりました。ほかに団体会員九名、賛助会員三名、国外会員一名がいます。

会員数だけではありません。研究誌『日本海セトロジー研究 日本海の鯨たち』は、現在、川井克二編集委員長を中心に第七号が発行される運びとなっております。また、情報誌『セトケンニューズレター』は、国本昭二普及委員長を中心として順調に回を重ね、記念すべき一〇号目を迎えました。セト研活動のかなめをなす漂着鯨類については、毎年行われる

研究発表の演題を見ても分かるように、かなりの成果があがっています。アムウェイ・ネイチャセンター油汚染救済基金助成金が得られたのも、これまでの実績がものをいったからでしょう。また、山田格漂着委員長を中心に全国的な規模でネットワーク作りが進められており、今年一月下旬に国立科学博物館との共催で、海棲哺乳類のストラレンジングに対応するためのシンポジウムを行う予定になっていきます。

以上のようにセト研は、研究グループというより研究会と言ったほうが相応しいほど、めざましい活動を展開してきました。ひとえに皆さまのご尽力とご協力のおかげですが、とくに事務局を切り盛りしてきた佐野修庶務幹事の働きが大きかったと思います。もはや庶務幹事というよりも事務局長といったほうが実態に即しており、対外的にもよいのではないのでしょうか。そこで私は、庶務幹事という名称を事務局長と改めることを条件に代表を引き受けることにしました。年々増大する事務量をこなすには、事務局体制を強化する必要がありますが、これは今後の大きな検討課題です。

私は、セトロジー(鯨類学)という点では傍系にすぎず、満足な資格・資質に恵まれていませんが、三代目で屋台骨が傾くということにならないよう、初代代表であられた山田致知先生のご意志を発展的に継承したいと存じます。幸い事務局長をはじめ漂着委員長、普及委員長が引きつぎ重責を担ってくださいますので、心強く思っております。文献委員長は兼務いたしますが、これまで抄録作成作業が私の個人的事情で足踏み状態にあったことを深くお詫びし、今後の推進を誓う

とともに、会員の皆様のいっそうのご協力をお願い申し上げます。

(註 セトケンニューズレター第一〇号からの転載に際し、挿入写真の原版が見つからないので、同時期に撮影した別の写真で代用した。)